



芝樋ノ爪小だより

<https://shibahinotsume.edumap.jp>

川口市芝樋ノ爪 2-10-48 TEL048-266-5265

学校だより
令和6年9月
川口市立芝樋ノ爪小学校
児童数：275名

「パラダイムの呪縛」からの脱却

校長 吉田 栄

長かった夏休みが終わり、学校では本日から2学期が始まりました。活気を取り戻した学校に心が躍ります。立秋を過ぎてはまだまだ暑さ去りやまぬ今日この頃、過ぎ去りし夏の名残りを惜しみつつ、今、秋の入り口に立っています。秋は朝夕に吹く風の中で、夜、草むらの中から聞こえる虫の声の中で、静かにそっと息をひそめています。9月「長月」。季節は僅かずつではありますが、確実に夏から秋へと進んでいます。

「治に居て乱を忘れず」…新型コロナウイルス感染症は、これまでに多くの人を苦しめ、時にはいとも簡単に尊い命を奪い去っていきました。繰り返される感染拡大。感染症は、日々の生活から、そして学校生活から、これまでの「人と人とのかかわり」をも奪い去りました。その結果、私たちの日常はこれまでとは全く違うものとなりました。と言うよりも、必然的にこれまでの日常を改めざるを得ない状況となりました。新型コロナウイルス感染症が感染症法上の5類に移行されて1年4か月が経過した今もなお、ウイルスとの闘いは継続しています。

そのような中、いつも胸に抱いていた言葉は、「できないことの原因や言い訳を考えるより、今はどうしたらできるかを考えるべきだ」という言葉です。どうしたらできるのか…。当然ながら、深刻なリスクを考えた場合、実現が困難なものもあると思います。しかし、自分で「できない」と思ってしまえば、始める前から「できないこと」となってしまいます。まるでやらないことへの言い訳のようです。やらないことに自分自身が納得すれば、当然ながら挑戦することもなくなってしまいます。未来の共生社会の形成者たる児童がそう考えているとすれば、それはたいへん大きな問題であると考えます。

こんなお話があります。「サーカスの象」というお話です。

あるサーカス団に一頭の子象がいました。片足を鎖でつながれていて逃げられません。それでも、その子象は、鎖をひきちぎろうと何度も何度も挑戦します。しかし、子象の力ではどうも鎖は切ることができず、とうとうあきらめてしまいました。

やがて、子象も大きくなり、立派な大人の象に成長しました。小さいころから片足を鎖でつながれているので、逃げようともしません。こんな鎖、今ならば簡単に引きちぎることのできる力をもっているというのに、子供の時にできなかったことで、もう引きちぎれないと思い込んでしまい、試そうともしません…。

というお話です。この子象は、「鎖は外れない」というパラダイムの呪縛にとらわれていると言わざるを得ません。「パラダイム」とは、端的に言えば「範例」のことで、特定の時代や分野において「支配的な規範となる物の見方や捉え方」のことです。科学・思想・産業・経済など、さまざまな分野で用いられている言葉であり、アメリカの哲学者であり科学者の トーマス・クーン によって提唱された概念です。特に科学分野では、天動説がその例として挙げられます。本来であれば、社会全体の価値観として用いられる用語であり、個人や個別の組織の発想を指すものではないとされています。しかし、現代の日本ではこうした概念が実に様々な場面で活用されています。

何も試していないのに「どうせできない」「できるわけがない」と考えてしまう場面はないでしょうか。これまでの経験、特に失敗経験からそう考えているのであれば、それこそが「パラダイムの呪縛」にとらわれている証です。児童には、今後自らの手で為し遂げようとする事柄に対し、「できない」などと考えてほしくはありません。虚無をも生み出す「パラダイムの呪縛」は、足音を立てずそうした心の弱さにそっと近づき、今、まさに私たちにその手を伸ばし始めています。

児童には、若き希望を胸に秘めた挑戦の2学期を、そして挑戦のための日々の飽くなき努力がもたらす大きな成長の2学期を過ごしてほしいと願ってやみません。

2学期も変わらぬご支援、ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。